

佐々木邦全集

佐々木邦全集

第四卷



佐々木邦全集 4

愚弟賢兄
奇物変物
奇人群像

昭和五十年一月二十日 第一刷

著者 佐々木邦

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―十二―二十一 郵便番号 一一二

電話東京(〇三)九四五―一一二(大代表) 振替東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません。

©佐々木孝雄 一九七五年

目次

愚弟賢兄 5

奇人群像 115

奇物変物 289

解説・尾崎秀樹 415

愚
弟
賢
兄

「馬鹿だなあ！」

私は元来兄貴のような秀才ではない。それは諦めていた。しかし低能では決してない積りだ。これでも小学校は四年まで優等が続いた。五年の春麻疹をこじらせて長いこと休んだものだから、算術が分らなくなった。それ以来調子が狂って下り始めたのである。中学校へ入ってから益々いけなくなつて、高等学校から大学まで先ず中軸から少し下のところで押し通した。悪い性分で勉強が利かない代りに、怠けると觀面(くわんめん)に下る。時にはビリから三番になつて酷く慌てたこともあった。しかし下には下があるもので、ドン尻まではナカ／＼落ちない。今度こそは危いと思つても大概及第している。

「お前は兄さんと違つて、競争心がないからいけない。席順の上ることは些つとも考えないで、下に未だ何人いるなんてばかり言つている」

と父から屢々お説法を受けた。

今考えて見ると中学時代は友達が悪かった。私と仲の好いくらいのものは大抵落ちる。カンニングをやつて捉まつた奴もある。兎角(うさく)好い最期を遂げない。斯ういう連中の間に介在して無事に凌いで来たのはせめてもの親孝行だと思

っている。尤も中学四年の時に肺炎をやつて三学期全部を休んだので一年後れた。それから高等学校の入学試験に一度刎ねられた。病氣と入学試験は不可抗力で仕方がないが、この為めに親兄弟の頭へ、

「家の貢二は何うも出来が悪い」

という印象を刻したのは遺憾千万である。

これで私は未だに迷惑している。親戚のものが来て、私達を褒めると、母は必ず、

「いゝえ、兄の方は申分ありませんが、貢二の方は中学も一年後れていきますし、高等学校も二度目で漸くなんでございますのよ」

と私を謙遜の材料に利用する。我田引水ではないが、兄貴のような最大急行は稀に見る例外で、二年ぐらい後れるのが当り前だ。今日同輩についてそれとなく訊いて見ても、小学校から大学までを停滯なしに通過して来たものは極く少い。何しろ十六年、足かけ十七年かゝる長町場の道中双六だから、大概是病氣でお泊りをしている。その上落第をやつたものもある。高等学校の入学試験に至つては、一度で合格しない方が統計からいっても正式に属する。

兄貴が秀才になつて私が益々鈍根を發揮するのは父に責任がある。子供の時に年が二つ違つと智慧が十分違つた。未だ年者の言行は年の数を計算に入れて考えなければ無理だ。然るに父は何ういうものか、この辺の理窟に頓着しなかった。

「貢一は頭腦明敏だ」

と事毎に兄貴を褒めた。少年時代には褒められるのが何よりの励みだ。兄貴は図に乗つて益々目端を利かした。

「貢二は兄貴に智恵を取られてしまったのか、些^ちっと鈍^にいようだぞ」

と私は兎角評判が好くなかった。その為め自分でも兄貴ほど伶俐^{りやう}でないと思ひ込んで、ダン／＼成績が悪くなったのである。

兄貴も二つ年の違うことを忘れて、

「お前は馬鹿だなあ！」

と度々私を貶^{おとし}した。無論悪意でなかったことは認めているが、それが私の自尊心を傷つけたことも争えない事実だ。一緒に小学校へ通い始めた頃、或日帰途^{かきち}に兄貴が空の馬力へ腰をかけて二三町盗み乗りをした。私は巧いことをやると思つて、次に空の荷車が来たから、ヒョイッと飛び乗つたら、

「この小僧！」

と車方に咄^{はな}鳴りつけられた。兄貴は大笑いをして、

「馬は黙っているが、人間なら直ぐ怒るよ。馬鹿だなあ！」と言つた。しかしこれは私が馬鹿だからではない。年が二つ違うからだ。一年生と三年生を同日に論じるのは無理である。

矢張りその頃のことだったと覚えているが、兄貴と私は目白を一羽宛買つて貰つて飼つていた。或日餌をやる時、私の目白が手の下を潜つて逃げ出した。

「兄さん、目白が逃げた」

と私は兄貴に加勢を求めた。兄貴は駈けて来て、

「好いことがある。おれの目白を持っておいで」

と命じた。私は兄貴の鳥籠を提げて来た。兄貴は庭へ下りて頻りに口笛を吹いていた。逃げたのを遠くへやるまい

という算段である。当時私は未だ口笛が吹けなかった。口笛のことをロペロと言つて笑われた。兄貴は上手で、殊に目白の真似が真に迫つていた。

「お前の籠と一緒に並べろ」

「斯うかい？」

と私は言いつけられた通りにした。籠の目白が鳴き出すと、逃げた目白も鳴きながら近づいた。

「おい、籠の口を開けろ」

と兄貴は目白を追うといけけないものだから、遠方から命じた。

「よし」

とばかりに私が兄貴の籠の口を開けたら、兄貴の目白が逃げ出した。

「馬鹿！」

と兄貴は飛んで来て私の頭を撲^むつた。目白は連れ立って隣家の庭へ行つてしまった。これは如何にも私が馬鹿のようだが、必ずしも然うでない。兄貴が開けろと言つたのは無論空籠のことだった。しかし私は厭で逃げ出したくらいものが唯で以前の籠へ戻るとは思わなかった。兄貴の籠へ喧嘩に入つたところを捕えるのだらうと頭を働かしたのである。あの際空籠を開けて待つたところで果して目白が戻つたか否かは未だに疑問に考えられる。

或時兄貴の友達が犬勢遊びに来ていて、庭の石榴^{ざくろ}の木に蜂の巣を発見した。

「何うだい？ 取ろうか？」

「刺されるぞ」

と少時^{しばし}評定の結果、クジ引きで叩き落すことになつ

た。

「此奴は尋常一年だからね」

と言つて、兄貴は流石に私を保護してくれた。クジに当たった奴が石榴の木の下で悲鳴を揚げるや否や、皆逃げ出したが、私は特に念入りに門の外まで落ち延びて戸を押えていた。兄貴はそれを発見して、

「馬鹿だなあ！ 蜂が門を開けて来るもんか」

と笑つた。

「矢つ張り尋常一年だから仕方がないよ」

と同情してくれた子は感心だと思つた。兄貴は晩飯の時を利用して、斯ういうことを一々父母に話した。母は然うでもなかったが、父は二歳の相違を考えないから、

「馬鹿な奴だなあ」

と言つて笑うばかりだった。

尚お兄貴は態々私が失策するように仕向けて両親や姉達に叱らせることもあつた。無論冗談の積りだが、性が好くない。

「貢二、これは何だか知っているかい？」

と兄貴は姉達が針仕事をしているところで、買ひ立ての扇子を見せびらかした。

「扇だ。馬鹿にするない」

と私は姉達への手前威張つてやつた。

「それじゃこれは何だ？」

と兄貴はそこに寝ていた猫を指さした。

「猫だ」

「名は？」

「玉さ。馬鹿にするない」

「それじゃこれで扇に玉だらう？」

「当り前よ。馬鹿にするない」

「けれどもお前は『扇に玉扇に玉』って早く言えるかい？ 口ペロも吹けないくらいだから駄目だらう？」

「言えるとも」

と私は意気込んで、「扇に玉扇に玉」を幾度も幾度も早口に繰り返した。すると大きい姉さんが突如私の口の端を掴つた。兄貴は手を拍つて笑つたが、忽ち姉さんに耳を摘まれて、

「御免だ／＼」

と言ひながら母のところへ引つ張られて行つた。姉達は皆公平だった。

或晩食事が済んだ時、

「貢二、面白いことがあるよ」

と兄貴が私を手招いた。

「何だい？」

「お前は斯う言う具合に口を両手の人指し指で括けて『橋の下の文庫』と言えるかい？」

「言えるとも」

「それじゃいつて御覧」

「よし」

と私は「橋の下の本コ」に少時苦心した。指で口を括けていると唇が合わないから、ブの音が何うしてもウになる。

「こら、他が飯を食っている時にそんな汚いことを言うな」

と未だチビリ／＼飲んでいた父が私を叱りつけた。

「貢一が悪いんですよ」

と母は知っていたが、兄貴はもう逃げてしまった。実に頭脳明敏だ。私にばかり貧乏クジを引かせる。

こんな風でも兄弟仲は決して悪い方ではなかった。家で私を馬鹿にする兄貴は外へ出ると私を大切にしてくれた。私を苛めるものがあれば決して唯は置かない。何んな強い奴にでもかゝって行く。それで私も案外幅が利いた。

「兄さんに言いつけるぞ」

と力むのが最後の武器だった。しかし兄貴を持っているものが他にも大勢あった。然ういう場合は兄貴の大ききで当人の強さが定る。尋常三年の時、私は車屋の久公という同級生と喧嘩をした。此奴は高等科に兄貴があるから、私より強いことになっていたが、止むに止まれなかったのである。果して翌日その兄貴が学校の帰途について来て私の頭を小突いた。兄貴はそれを聞くと烈火のようになった。

「お前も来い」

と言うが早く車屋へ駆けつけて、久公兄弟を原っぱへ誘き出した。私は久公と喧嘩のやり直した。盛んに撲り合った。兄貴同志は取っ組んで振じ合った。そこへ出入りの魚屋の小僧が通りがゝって、

「坊ちゃん、しっかり」

と言いながら、久公の兄貴の足を天秤棒で払った。転んだところを押えつけて、兄貴は散々撲った。鼻血が迸った。

「おいらの所為じゃねえぞ。三年烏の所為だ」

と魚屋の小僧が荷を担いで逃げ出すのを合図に、私達もおっ走って来た。しかし翌日から曳子が通学の妨害をし

た。久公の家は車宿だから曳子が数名いる。その一人が私達を追って来たのである。

「よし。大人が出るのか？」

と兄貴は憤然として、当時家の書生をしていた山口さんを頼んで引き返した。山口弁護士もその頃は弁論よりも腕力だった。車屋へ談判に行った序に曳子を張り飛ばして大騒ぎになった。

兄貴はこれぐらい身最負が強いくせに、家では我儘で、私を重んじてくれなかった。

「貢一や、お前は貢二のことを然う馬鹿々々って言うものじゃありませんよ。可哀そうに、真正に馬鹿になってしまいますよ」

と母は時折目に余したようだった。その中に兄は府立中学へ入ったが、私は果して馬鹿になり始めた。五年六年と成績が振わなくなつて、受持訓導も、

「多田さんは府立は思い切つて何処か私立を受けたら宜いでしょう」

と等級をつけてくれた。先生まで馬鹿にすると人間は益と馬鹿になる。私立へ入つても一向入り栄えがしなかった。もう一方兄貴は府立で優等を続けていた。私は何うも頭が上らないと思った。そこへ持つて来て、

「貢二や、分らないところは兄さんに見て貰え」

という父の命令だ。兄弟関係が師弟関係になった。一年と席次が下って行く。揚句の果に病気で一年後れる。高等学校の入学試験に落ちる。いやもう散々で、私は鈍才、兄貴は秀才と折紙がついてしまった。

さて、現在に戻ると、私の卒業試験が近づいた時、

「何うだい？ 及第しそかい？」

と兄貴が訊いた。兄貴は大学生の私に対しても昔の通り遠慮がない。こんな失敬な質問を平氣でする。

「大丈夫ですよ、大抵」

「その大抵が氣になるんだよ」

「クラスのが三分の一落第しない限り大丈夫です」

と私は安心させてやった。父も度々注意してくれたが、未だに下を勘定する癖があつていけない。しかし教授の中に頗る点の辛い難物が二人までも頑張っているから、無条件で大丈夫とは断言出来なかつたのである。

「まあ、大にやるんだね」

「やります」

「土俵際まで来て年貢を納めるようなことがあると、おれの予定が狂うぜ」

と兄貴は私が一度も落第しないで来たのを何か目こぼしのように思っている。

嫂も私の試験を案じて、

「貢二さん、あなたはそんなに毎晩出て歩いて宜いんですか？」

と油断のないように氣をつてくれた。有難いが、不見識を免れない。嫂とはいふものゝ、私の方が三つ年上だ。

日頃兄貴が侮るのを見ているから、好い氣になつていつまでも学生扱いにする。

「友達の下宿へ勉強に行くんですよ」

と私は嘘をついてやった。

「それなら宜うございますけれど、貢二さん、あなた実はキの字じゃなくて？」

「キの字って？」

「キ……ネ……マよ。オホ、ハ、ハ」

「何うして／＼。それどころじゃありません」

「でも先刻御飯の時に新聞の黒っぽいところを睨んで考えていらしたわ」

と嫂は美事私の方寸を言い当てた。試験前でもこの通りだから成績を危まれるのも無理はない。

兄貴は小学校から大学まで棒押しに進んだから、年は二つしか違わなくても、卒業からいうと四歳の長者になる。早く社会へ出れば、それだけ世故に長ける。尚お四年前に父が死んでからは戸主だし、一昨年嫁を買って立派な良人振りを發揮している。何の点から見ても兄貴に相違ない。

それで以前は「おい」と言えば「何だ？」と答えたが、昨今は特に敬意を表して、「何です？ 兄さん」と下から出るようにしている。そこを買って此方へも少し色をつけて貰いたいのだが、兄貴は氣のつかないこと夥しい。

「この間の話じゃあ卒業の方は大抵大丈夫だそうだが、就職の方は何うだい？ 飯を食う方は？ お前のところあたりまでお鉢が廻つて来そうかい？」

なぞと私の活券にかゝるようなことを嫂のいる前で訊く。

「採用は必ずしも成績によらないんだそうです。会见で定ります。学校へ申込んで置きましたから、その中に何とか沙汰がありましょう」

と私だって然う見括ったものでない。学校は学校、社会は社会だ。ノートを丸呑みにする奴ばかりが生存競争の勇者になるとは限らない。

「会見というと人物試験だろう？」

「然うです」

「人物試験じゃ逆も駄目だぜ」

「でも貢二さんは押し出しが好いから有望ですわ」

と嫂が励ましてくれた。成績の方は悪いけれどもと言わないばかりだ。実に厭なことが家庭の伝説になったものである。

或日兄貴が私の部屋へ女中を差し向けた。

「お手空きならば一寸洋間の方へと旦那さまが仰有います」

という使命だった。兄貴は家長の権能を示す積りか、呼ばば聞えるのに、時々こんな形式を用いる。

「兄さん、何か用ですか？」

と私は兄貴の書斎へ入って行った。

「まあ坐れよ」

と兄貴は椅子を薦めて、卓子の上の葉巻の箱を私の方へ押した。こゝへ来るとマニラやエジプトに有りつける。

「今おれの言うことは親父の言葉と思って聴いてくれ」

「はあ」

「他のことでもないが、お前は今度はイヨ／＼卒業するから、身の振り方が定り次第、嫁を貰って分家をしてやろうと思う」

「そんなことは何うでも宜いですよ」

「何とか言っている」

「いや、実際そんなことは未だ考えていませんよ」

と私は嘘でも何でもなく、就職問題と卒業試験に屈託していた。

「お前は兄貴と一緒にいて叱られるのが厭だから、早く何とかして貰いたいって、姉さんのところへ運動に行つたらう？」

「何処の姉さんです？」

「ふうむ、それじゃ方々へ行つたんだね？」

と兄貴はナカ／＼鋭い。

「冗談言っちゃいけませんよ」

「麴町の姉さんさ」

「それは姉さんの拵えごとです」

「でもこの間来た時に然う言つたぜ」

「あれは姉さんが『兄さんは相変らず小言を言うだらうね？』と訊いたから、『えゝ』と言つたんです。『早く分家をして貰う方が宜いわ』と来たから、『然うですな』と否定しなかつたわけで、此方から頼んだんじゃありません」と私は弁解に努めた。

「まあ宜いさ。兎に角異存はあるまいね？」

「無論ありません」

「ところで心当りがあるかい？」

「何の？」

「嫁のさ」

「ハッハ、。ありませんよ」

「それじゃおれ達に委せるかい？」

「さあ」

「矢つ張り多少あるんだね？」

「いや、一向」

「それじゃおれ達で定めても宜いかい？」

「さあ」

「一寸行き詰まったね。まあ／＼急ぐことはない。おれの意思が通じてさえいれれば宜い」

と兄貴はもう追究しないで、私が内心大に期待していたにも拘らず、全然懸け離れた世間話を始めた。

こゝで家庭の関係を詳細に紹介して置く必要がある。私達は目下母と兄貴一夫婦と私の四人きりだ。兄貴の上に姉が三人あるが、皆もう疾うに嫁に行つて三人四人の母親になつてゐる。父は司法官で可なりのところまで出世したが、金は残さなかつた。しかし在来持つていた相応広い家屋敷がある。それに東京が今日のような発展を夢想しなかつた昔押しつけられるようにして買った市内の地所が二千坪足らずある。地価暴騰の近頃では両方併せると一財産だ。父の歿後兄貴がこれを悉皆相続した。地代が大分上るので生活の心配は些々ともない。兄貴はその上に新進作家として結構収入があるから始終福々だ。私のように俸給で縛られたがつて運動してゐるものとは身分が違ふ。随つて大きなことばかり言つてゐる。

「貢二や、お前も卒業すると分けて貰えるんだから、精を出して勉強なさいよ」

と母は時々言つてくれた。

「そんなものは何うでも宜い」

と私は学生時代だったから、慾がなかつた。

「その時は姉さん達にも何とかしてやらなけりやね。芳江は然うでもなかつたけれど、千代子と信子は家が未だこれほどにならなかつた頃片付いたんだから、支度が悪かつたんですよ。貢一の祝言の時に較べると、てんでお話になりませんの。千代子も信子も気がついたと見えて、後から厭

味を言つて寄越しましたよ。出来ることなら何とかしてやらなけりやね」

と母は娘達のこととも考えていた。女は胸の中を秘めて置くものでない。疾うに姉達も鰻の香を嗅ぎつけてゐる。一番上の千代子姉さんは私の顔を見る度に、

「貢二さん、早く卒業して分けて貰いなさいよ」と促す。

「姉さんも貰えるんですつてね？」

と私は直ぐに胸襟を開く。

「請求する権利はないそうですけれど、くれゝばいくらでも貰うわ」

とこの姉さんは判事のところへ片付いてゐるから、良人を顧問に研究した形がある。

「ナカ／＼慾が深いんですね」

「だって赤の他人のお嫁さんに悉皆渡してしまうのは惜しいじゃありませんか？ 千円でも二千円でも取れば取り得よ」

「それは實際然うですな」

と私も然う言われゝばその氣になる。姉さん達の家へ行くと、兄や嫂の陰口を利きたくなること不思議だ。

「里も昔とは悉皆違つて来ましたね。羨ましいわ。家なんかとは丸つきり生活の程度が違いますよ」

「ナカ／＼贅沢をしています。しかし部屋住みの僕には都合が好いです」

「それは然うね」

「兄さんはあの通りですから、生計のことなんか何が何だか分りません。学問が出来て豪い口を利いても、経済上の

低能児ですよ。そこへ持って来て姉さんが派手好きでパツパツとやりますからな」

「貢一は何でも貞子さんの言いなり次第ですってね？」

「然うでもないですよ。あれで痼癪持ちですから、時々叱りつけます」

「すると貞子さんは何うしますの？」

「泣きます」

「まあ、泣いて脅すのね？」

「それから兄さんがあやまります」

「何にもならないわ」

と千代子姉さんは吐き出すように言った。

信子姉さんを訪問しても私の卒業が問題になる。この正月年始に上った折も、

「貢二さん、イヨ／＼今年ね」

と先ず喜んだ後、

「随分待ち遠いでしょう？」

と慰問してくれた。私は卒業よりも分けて貰うことと解して、

「その時は姉さんの分も多少請求して上げますよ」

と直ぐに水を向けた。

「私、一万円以下じゃ承知しないわ。権利があるんですもの」

とこの姉さんは弁護士のところへ片付いているから、元来ない権利をあるように教えられているのらしい。

「精々千円ですよ、姉さんは」

「そんな無理なことがあるのですか。家屋敷丈けは貢一に渡しても、地所の方には私、お父さんと約束があったん

ですよ」

「はゝあ」

「私がお嫁に来る時分は姉さんのお支度でもうお金がなかったから、お父さんは地所を一部分売ろうかと仰有ったんです。それを私が着のみのまゝで結構ですから、御遠慮して思い止まされたのよ。して見れば私は多田家の功労者ですもの、その分権利がありましよう？」

「お父さんがその時何とか仰有ったんですか？」

「何とも仰有いませんでしたが、後から何うかしてくる氣だったことは確かですわ」

「それじゃ約束とは言えませんよ」

「でも親子の情愛として、それぐらいのことは常識で察しられますわ。お母さんも私が辛抱したことを能く御承知ですからね」

「そんなことじゃ逆も駄目です。権利は生じません」

と私は信じるまゝを言ったが、姉さんは妙に誤解して、

「貢二さん、あなたは私と財産争いをする積り？」

と躍起になった。女というものは分らないから困る。

「姉さん、権利のないことは私だって同じです。此方から要求は出来ません。万事兄さんの思召次第だからお互に心細いんですよ」

「詰まらないわ。そんなことなら、私、地所を売って貰って十棹も持って来てやるんでしたのに」

「女の方が得でしたよ」

「女って損なものね。里の為めを思ってやったのが何にもならないんですよ」

「元来法律という奴は女に不利益に出来ています。自分の

家庭の爲めを思っている、余り徳はつきまませんぜ。例えばこの御主人が亡くなっても、特別の遺言がない限り、財産は容易に姉さんの手へ入らないようになってるんですよ」

と私は弁護士夫人に民法の講釈をして聞かせた。

「厭なことを仰有るのね」

「何うも相済みません」

「貢二さんも法律を習っていますの？」

「え、経済科ですが、学科の中に入っています」

「少しは分って？」

と信子姉さんも取るに足らない家庭伝説の影響を受けて、肚の中では私を馬鹿だと思っている。

もう一人の姉芳江さんに至っては一番の器量好しで金持の物領息子に縁づいているから、分けて貰うなぞという卑しい考えは頭がない。極く鷹揚だ。能く子を生む。一人一人に乳母をつけて、育てる方は分業だから、些つとも年を取らない。姉さんの配偶の妹さんが又お美しい。当年二十で去年東京女学館を卒業している。私は分家をして貰うことを考えると、いつも、この美人のことを考える。兄貴に「任するか」と訊かれた時、行き詰まったのもその爲めである。但し心当りといえど心当りだが、全く独り定め心当りに過ぎない。

「貢二さん、あなたは卒業したら君子さんを貰っちゃ何う？」

と芳江姉さんが言ってくれると宜いのだが、ナカ／＼察しの悪い人で困る。しかし君子さんは私を嫌ってはいない。私が行けば必ず出て来て芝居や活動の話に打ち興じ

る。現にこの間も、

「貢二さんはもう直ぐ御卒業でございますわね」

と一身上の問題に触れてくれた。

「え、大抵大丈夫です」

と答えてから、私はしまったと思った。

「もうソロ／＼お支度でお忙しいんでございましょう？」

「え、しかし怠けものですから、間際にならないと一生懸命になりません」

「学生時代に終りを告げるのは何となく物悲しいものでございますわね」

と君子さんが述懐した。

「でも、試験がなくなりますからね」

と私は再びへまをやった。

「貢二は試験下手で、中学時代から苦み通しよ。けれども感心に落第丈けは一遍もしなかったわね」

とこの時姉さんが最負の引き倒しをしてくれた。

「馬鹿にしちゃいけませんよ、ハッハ、ハ、」

「お兄さんは随分御成績がよろしかったそうでございますのね？」

と君子さんは知っていた。

「それ丈け貢二は苦勞します。決して悪い方じゃありませんけれどもね」

と姉さんは弁解してくれた。

一身上の問題は有難いが、何うも危い。悪い印象を与えるばかりだと思つて名譽恢復を心掛けてゐる矢先、

「姉さん、私、あのことを貢二さんに伺つて見ますわ」

と君子さんが、何か考え出した。

「あなたは狂人ね」

と姉さんが笑った。

「でも口惜しいから皆さんの御意見を伺って見ますの。貢二さん、ペンギン鳥は北極にもいるものでしょうか？」

「ペンギンですか？」

「えゝ、然うよ」

「無論北極にもいるでしょう」

「私も然う思いますの。実はこの間お友達とお話をしている時、ペンギン鳥が北極にいたと言つて、私、笑われましたのよ。あれは南極に限るもので、北極は白熊ですつて」

「白熊だって南極にいますよ」

「私も南極にいますのは北極にもいると思つてゐるんですが、そのお友達が何処までも強情を張りましたから、目下研究中なのよ」

と君子さんは真剣だった。

「私も研究して見ましよう。北極にもいそやなものですな」

「いませんよ。お生憎さま」

と姉さんも反対論者だった。金持の若奥さんは流石に閑がある。

「姉さんと兄さんが組になつて譚いますから、私、口惜しくて口惜しくて」

「私はあなたの組です」

「頼もしいわ。何かオーソリチーを見つけて出して教えて下さいよ。皆をやり込めてやりますわ」

「及ばずながら調べて見ましよう」

と私は馬鹿なことを引き受けて、何だか竹取物語のよう

な心持になった。

就 職 難

私は勉強をしながら他のことを考える癖がある。机に向つて一心不乱、寝食を忘れるなぞということは残念ながら経験がない。眼を書物に曝していても、飯時は腹加減でチャンと分る。

「若旦那様」

と女中のお富が障子を開ければ、

「御飯だらう」

と此方から凶星を指す。夜でも寝る時間には必ず睡くな。決して判断を誤まらない。尤も勉強中飯のことや寝ることばかり考へてゐるのではない。他のことも自ら心に

浮んで来る。兄貴に言わせると、私はこれがいけない。「法科や経済科の秀才と来たら、夜の目も碌に寝ませんよ。貢二のように無理をしなくて好い成績が取れるもんですか？」

と兄貴は母親に説明して聞かせる。

「宜いよ。何うせお前とは違ふんだから」

と母親は私の健康を考へてくれる。

「何あに、努力が足りないんですよ。貢二、もっと猛獣式にやれ」

「兄さんの真似は出来ません。第一学科が違います」

と私にも私の考へがある。兄貴は文学をやっている。殊にこの頃は小説を書き始めて、気が乗ると徹夜をする。

「獅子なぞが獲物を漁る時は徹夜だ。豪い努力をやる。そ